

[新版]

たった一人の命だから  
ワンライフプロジェクト 編



「たった一つの命だから」

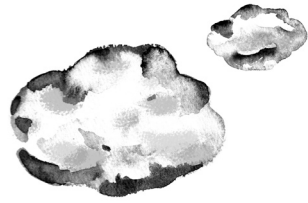
これは、病気で利き腕を失った14歳の少女、西尾<sup>にし おえい か</sup>誉佳さんが、残された左手で年賀状に筆書きした言葉です。

この年賀状をきっかけに、「たった一つの命だから」という言葉につなげるメッセージを募集する活動「ワンライフプロジェクト」が生まれました。2006年5月、福岡県筑後地方で主婦と高校生が中心となって始めた手作りの活動です。

メッセージの呼びかけは、ラジオ放送や各地の小中高校での朗読会、SNSなどを通じて全国に波及していきました。誉佳さんは自らの言葉の広がりにも驚きながらも心から喜び、活動メンバーと交流を重ねましたが、残念ながら闘病の末に2007年8月、16歳と4か月の生涯を閉じました。

その後もメッセージは増えつづけ、その数は2万通を超えています。集まったメッセージは本になって、これまでに4巻まで出版されました。このたび『新版 たった一つの命だから』として、最近までのメッセージを編むとともに、誉佳さんとの出会いとプロジェクトの道のり、そして誉佳さんのお別れまでのことなどを巻末でお伝えすることにしました。どうぞ併せてお読みください。

一般社団法人ワンライフプロジェクト



「たった一つの命だから」のあとに、  
あなたはどんな言葉をつなげますか？



## パパが空へ行って1年

去年の9月、ガンと闘った主人が遠い世界へ旅立ちました。あれから1年。1年もたつというのにこの1年間を思い出すことができません。

それほど、私は空っぽの生活を送ってきました。

先日、3歳の娘・ランが手を切りました。持っていたのはピーラー。咄嗟にひとつ年上のミュを叱りました。「なんで勝手に台所で遊ぶの！ランに怪我までさせて！」と大きな声で怒鳴りました。

ミュはうつむいてピーラーを握り締めて静かに泣いて謝りました。

ふと、娘の横に置いてあるボールに目をやると、ピーラーで皮をむいたじゃがいもが3個入っていました。そのじゃがいもはデコボコでした。

遊んでいたのではなく、料理をしてきていたのだと気がきました。

「お姉ちゃん、料理をしてくれようとしたの？」と尋ねると、怪我をしたランが答えました。

「あのね、ママが喜ぶように、カレーを作ろうってお姉ちゃ

んが言ったの」

この言葉を聞いて、私は2人の娘を抱きしめて謝りながら泣きました。

次の日、保育園の先生方にこの話をしました。

保育園では月に2回、年長さんの料理教室があります。

先週はカレーを作ったのですが、その時娘は先生に話したそうです。

「パパがお空へ行ってから、ママはいつも怒ったり寂しそうにしている。ママが笑ってくれるように今度カレーを作ってあげるんだー」と。

誰よりも熱心に野菜の皮を剥き、出来上がるまで鍋の傍を離れずとても真剣だったと…

先生の話は続きます。

「みゆちゃん、カレーが出来上がり みんなが食べ始めると、ひとり下を向いて涙をほろほろ流し始めたんです。

『どうしたの?』と訊くと、

『パパと食べたことを思い出した』と答えて、大泣きしたんですよ」

私は1年間、ただ、ぼーっと生きてきました。

でも、そんな私を幼い子供たちは一生懸命慰め、力づけよ

うとしてくれていました。

天国のパパ、ミュとランとがんばるから。

たったひとつの命だから

生きる強さを娘たちに見せてあげられる母親になりたい

福岡県 ミュとランのママ



## おばあちゃんの体操服入れ

たったひとつの命だから やりたいことをやって生きていきたい

私には夢があります。それは、小さなお店をすることです。店の中には、私が作ったクッションやポーチ、手提げ、アクセサリーを並べます。

外には大きなベンチを置いて、道ゆく人の休憩場にしてみたいです。

お店の看板には「学校に行きたくない子どもたち、入っていいですよ」と、書きます。

私は、小学6年から学校へ行ってません。

友達から、仲間はずれにされている子を助けたら、その次の日から私が仲間はずれにされました。

ある日、おばあちゃんが作ってくれた体操服入れが、カッターでザクザク切られました。

私にとって、おばあちゃんの手作りの中で一番のお気に入りでした。

ひどすぎる！

おばあちゃんがそれを作ってくれたころは、もう、ほとんど目が見えない状態でした。

時間をかけて作ってくれた物でした。

おばあちゃんは、それから半年で亡くなりました。

いつも、心をこめていろんな物を作り、それを人にあげて、喜んでいました。

細かいところまで丁寧に仕上げるので、お店を出したらいいのになって、周りの人に言われていました。

私の、その思い出の体操服入れは、心ない人たちにボロボロにされてしまいました。

それから、学校へ行けなくなりました。

どうしてこんなひどいことができるのか、たくさん考えました。

その人たちには、心があるのかなって思いました。

私は、おばあちゃんの部屋で、おばあちゃんの物をさわっているうちに、私も作ってみようと思いました。それから、針と糸とミシンが私の友達になりました。

私は、もう 18 歳です。堂々と生きていく自分になるため



の時間を、過ごしてきました。

学校へ行かなくなった私をいっぱい心配してくれたお父さんやお母さん、

私は、人と違うかもしれないけれど、しっかり生きていきますから、これからはもう心配しないでください。

私は、必ず自分の夢を叶えます。  
たったひとつの命だから。

匿名

## 額の傷

初めてメールします。

最初にワンライフプロジェクトのブログに出会った時から、いつか自分も書けるんだろうかと思っていましたが。

2年半たち、自分と向き合い、やっと書くことができました。

僕は、小さい時から親の暴力を普通と思って生きてきました。テレビドラマは作り物。

現実の親は子供を殴り、ののしり、言葉は命令形、それが普通だと思っていました。

小学5年の時に、ぶたれて倒れた際に、テーブルの角で額を切りました。

おびただしい量の出血に、さすがの父親も慌てて僕を病院へ連れて行ってくれました。

7針縫いました。

その時に、父親から、どうして怪我をしたのか訊かれたら、転んだと答えろと命令されたのですが、僕は勇気を出しました。

病院の先生に、父親にぶたれたと答えました。

先生は、僕に裸になるように言いました。

全身のアザを見て、ある所に相談をしてくれました。

母親は、夜の仕事をしていたので、僕にこんなに多くのアザがあるとは思っていなかったようです。

僕も、母親には何も言えませんでした。

僕と父親の間に入って、母親が暴力を受けるのは避けたかったからです。

病院と母親と児童相談所の先生、3人の話し合いが始まり、僕は、1人である施設で生活することになりました。

翌年、両親が離婚をして、それから祖父母の家で暮らすことになり、今は平和な日々を送っています。

僕は、父親の暴力に耐えながら、何で僕を産んだりしたんだ!!と、母親を恨みました。

僕が生まれてきて喜んでいる人なんかいないじゃないか！これが、僕の心の声でした。

僕はあの時、勇気を出して本当によかったと思っています。いい人たちに話したことで、今の自分があるからです。

僕は、11歳でした。

僕と同じ思いをしている子供たちが、たくさんいるのかもしれない。

子供は、1人ではどうにもできないことを、もっとたくさんの人に知って欲しい。

子供を愛せないのなら、子供なんか産むな。

子供を愛せなくなったなら、手元に置いておかず、他の人に育ててくださいとお願いをして欲しい。

親だからという責任感だけで、一緒にいるのは間違っている。  
親に育ててもらわない方が幸せなことだってあるのだから。

そして、僕は思う…

たったひとつの命は愛がなければ平和を壊してしまうと  
たったひとつの命だから 心優しくありたいと

北海道 18歳

